

液体ねん土を用いた造形表現活動： 加古川市内の小学校における実践研究 I

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安部, 永, 安部, 尚平 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4801

液体ねん土を用いた造形表現活動 —加古川市内の小学校における実践研究Ⅰ—

児童教育学部 児童教育学科 安部 永
加古川市立志方小学校 安部 尚平

要旨：小学校学習指導要領（平成 29 年告示の図画工作科の目標には、育成する資質・能力の三つの柱のそれぞれに「創造」が位置付けられ、図画工作科の学習が造形的な創造活動を通して、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成するものであることが示されている。このことから、図工科は、「子どもらしい姿や世界」を造形活動を通してより豊かに、力強く育むことで学童期の子どもの感性の発達に大切な役割を果たしているといえる。この度は発達段階に応じた題材と授業展開の工夫や教師の支援と評価のあり方について、液体ねん土の実践を通して研究を行ったその記録の報告である。

キーワード：造形活動、図画工作科、児童、液体ねん土

1 はじめに

本研究は液体ねん土を用いての実践報告である。

図画工作科学習指導要領〈平成 29 年度告知〉における、図画工作教科の目標 (3) は「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」とある。

今回扱う粘土は液体ねん土であり、紙粘土に水を加え、液体にした粘土である。乾燥すると固まるが、硬化時間が 20 分ほどの石膏と違い、硬化が緩やかであるため作業工程にゆとりが持てる。また紙が主原料となるため、通常的水彩絵の具で着色が可能であるなど、児童にとってゆとりのある制作活動が行えるのもよい教材であるといえる。この液体ねん土に、身近にある素材を加えることで、様々な立体表現が可能である。空間を想像しながら作品を作ること、教科の目標を達成することができる教材であると期待する。

この度は「自分の思いや考えを、生き生きと伝え合う子をめざして」を研究のテーマとする。図工科においても絵を描いたり、物をつくったりという人間（子ども）の本能でもある自己表現に接している教科として、その力の発達を支え、牽引していく必要があるだろう。

子どもは生まれながらにして発想豊かで柔軟であり、子どもにはできても大人にはできない表現や遊びなどの多くの子どものらしさを持っている。図工科は、この「子どもらしい姿や世界」を造形活動を通してより豊かに、力強く育むことで学童期の子どもの感性の発達に大切な

役割を果たしている。学習においては「子どもらしい表現＝思いや考え」を大切に、「思いや考え」を広げ、深めるために発達段階に応じた題材と授業展開の工夫や教師の支援と評価のあり方について研究を行った。また、学習の中で基礎的な能力を培う活動を取り入れたら、言語活動を活発に促したりすることで、造形活動の楽しさ、美への感動を深める工夫をした。作品をつくりあげた達成感に心を躍らせる豊かな体験を“生きる力”につなげていきたいと考える。

2 実践報告

実践期間：平成 23 年度の液体粘土の実践について報告および考察を行う。

実践例「のばして固めた白の世界」

実践報告の手順として以下の 7 項目をたてた。

- 1.1 目標
- 1.2 題材について
- 1.3.1 指導について（学習計画と準備物）
- 1.3.2 題材の授業過程
- 1.4 児童の感想例
- 1.5 作品例
- 1.6 考察

なお倫理的な配慮として研究の目的、方法、研究協力に関する説明をし、データおよび個人情報取り扱いの配慮、研究目的以外では使用しないことを当該小学校と確認し同意を得た。

2.1 実践例

場所：加古川市立平岡南小学校
 対象：6年生
 題材：「のばして固めた白の世界」

2.1.1 目標

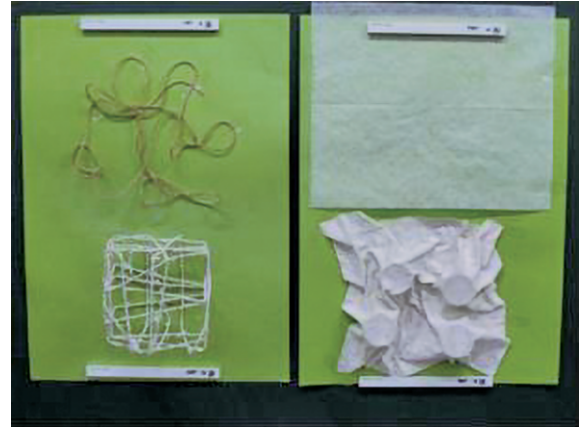
目標として以下の4点について設定した。

- I 液体ねん土に関心を持ち、材料を探したり、やわらかいものを固めたりしてつくることに意欲を持って取り組む。
- II 自分のつくりたいものや白だけの世界を想像し、材料の特徴を生かしながらつくることができる。
- III 液体ねんどや材料の特性に気づき、試しながら工夫してつくることができる。
- IV 自他の作品の表し方の工夫などに気づき、発表やまとめをすることができる。

2.1.2 題材について

本学年の児童は、1学期に「一足の靴」を学習し、画家ゴッホの作品を鑑賞しながら6年生になった思いを込めて自分の運動靴を絵で表した。「古代人は芸術家」では、校外学習で学習した縄文人や弥生人の生活から想像を広げ、手びねりやひもづくりの技法で土器づくりに取り組んだ。そして、「クロッキータイム」では、学習の初めに短時間でものを見て描く基礎学習をつみ重ねてきた。子どもたちの生活面においては、豊かな情報、便利な生活環境の中での恵まれた暮らしであるといえるが、生活や身近な自然の中で体験や遊びを通して、紙や布、土や枝などの素朴な造形素材の良さに親しむ機会は減ってきている。

本題材は、液体ねん土を使って布や紙などの柔らかい素材を固め、思い思いの形をつくるものである。布やひもなどの素材にクリーム状の粘土をしみ込ませたり、ぬりつけたりして固めることで、それ自体では立たせられないものでも形状を固定することができ、立たせることができる。図①また、材料の表面を白い液体ねん土でカバーして色を封じ込めてしまうことから、白い世界のイメージについて想像を巡らせながら、色のない、形を際立たせた光と影の造形の世界を味わうことができる。



図① 「ひも」「不織布」を固めた例

2.1.3 指導について

指導においては、液体ねん土の材料体験を十分楽しませながら、素材がねん土のしみ込み加減の違いで、粘りけを持った時にみせる造形的な姿の変化や、徐々に固めながら形をつくるものづくりの面白さを味わわせたい。また、“色”を排除して表現する「白の世界」というファンタジックなテーマを、身の周りの自然や芸術作品から見つけたりしながら子どもの思いを十分にふくらませていきたい。そして、完成した作品にLEDライトで光をあてるなど鑑賞を工夫することで、白で表す造形表現の楽しさや、自分の身の回りにある「白」についての美しさを深めさせたい。以下①学習計画と準備物、②題材の授業過程（全6時間）で報告する。

①学習計画と準備物

学習計画(全6時間)	準備物
第1次(1時間) ・参考資料を見て学習について考える。 ・白い世界や使いたい材料について考える。	[児童] クロッキー帳、筆記用具、布や毛糸など柔らかく軽い材料 [教師] 参考資料、学習プリント
第2次(4時間) ・液体ねん土でつくる。→固める。 (1回目) ・液体ねん土でつくる。→固める。 (2回目)	[児童] 筆、はさみ、布や毛糸など柔らかく軽い材料 [教師] ビニールシート、液体ねん土、ボール、ダンボール、参考作品
第3次(1時間) ・学習のまとめ、鑑賞会をする。	[児童] 作品、筆記用具、LEDライト [教師] 学習プリント、題名カード、書画カメラ、プロジェクター

③題材の授業過程（全6時間）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
1	1時	①液体ねん土について知る。 ・教科書を読む。 ・参考資料、参考作品をみる。	○白の世界の写真や液体ねん土で固めた作品の面白さに気づかせ、関心を持たせる。	・やわらかい材料を固めてつくることに関心を持ち、学習のめあてをつかむことができる。
		②アイデアを考える。 ・学習プリントに書く ・自分の探してきた材料を発表する。	○材料が固まることを推測したり、色々な材料が使えたりすることに気づかせる。	・白の世界をテーマに想像を広げ、アイデアを考えることができる。
2	1・2時	③液体ねん土でつくる。 ・イメージにあった材料を選ぶ。 ・ねん土と水を溶きクリーム状の液体ねん土をつくり、材料にしみ込ませる。 ・大まかな形をつくる。	○液体ねん土が固まるまでの工程を考えて計画的に取り組ませたい。 ○材料へのしみ込み具合や水とねん土の溶き具合を助言する。 ○思うようにできにくい児童は個々に応じて支援する。	・自分から進んで表したい材料を選ぶことができる。 ・液体ねん土を色々な材料にしみ込ませて工夫することができる。 ・表現の面白さに気づき発想を広げる事ができる。
		④液体ねん土で付け足す。 ・プロジェクターで参考作品をみる。 ・固まった上に付け足しながら細かい形をつくる。	○作品発表の場を設け、友だちの作品や考えを知ること自分の作品のイメージを広げさせたい。 液体ねん土を筆でぬり、補強を兼ねた作り方の工夫をさせたい。	・自分の考えや発表を聞いて感じたことを生かし、作品の続きをすることができる。 ・テーマの良さを表すために自分なりの工夫をすることができる。
3	1時	⑤作品鑑賞と学習のまとめをする。 ・学習プリント ・作品展示 ・作品発表会	○LEDライトで作品の雰囲気を出す工夫させたい。 ○自他の作品の面白さや違いを見つけ、良さを共感させたい。	・自他の作品の表し方の工夫などに興味をもって鑑賞し、まとめをすることができる。

2.1.4 児童の感想例

白の世界は静かな雰囲気を出したり、楽しい雰囲気を出したりできるので、つくるのがとても楽しかったです。白色だけでも色々なことができるのが面白かったです。(kさん)

白は、色が目立たなくて他の色と混ぜて使っていたので、白だけじゃ寂しいんじゃないかと思ったら、意外にもきれいに見えて白はすごいと思いました。(Gさん)

白は雪とか雲とか白鳥とか色々あるけれど、液体ねん土を使って白へのイメージや印象がかわりました。

静かで時間が止まったみたいでした。(Hさん)

色々な色でまとめるより、白一色のほうが落ち着いているし、現実とはちがう世界みたいな感じで白ってこんなに美しかったんだな！と思いました。(Kさん)

白の世界は、とても落ち着いていて、すっきりとした気分になれます。白は全てをリセットできる色だったと思います。とても清潔な感じの色です。(N君)

最初は白の世界と言えば、雪しか思い浮かばなかったけど、自分の作品をみたら不思議な世界という美しさが強く伝わってきました。(A君)

2.1.5 作品について



図②

図②は素材としての段ボールや廃材を生かして、制作されている。遊園地のような趣もあり非常に面白い。意図的に液体ねん土をかけ分けており、立体的な造形が楽しい作品である。



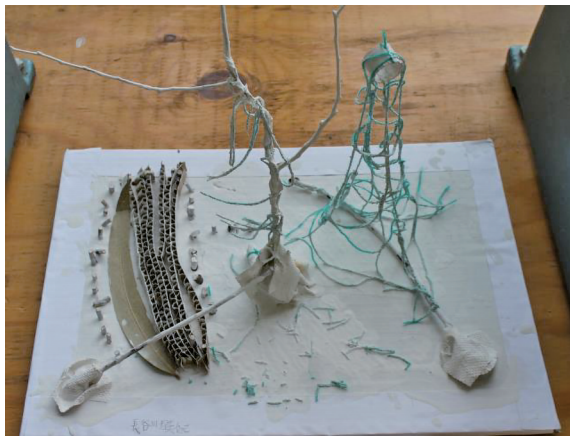
図③

図③は綿と液体ねん土を使い、雲の中を表現している作品である。中央の立体はツリーを表しており、作者が制作しながら作り出した物語性を感じさせる。竹ひごや新聞紙の棒が液体ねん土で真っ白になり独特な世界観を作っている。面白い表現である。



図④

図④は内部に発光する仕組みを作った幻想的な作品である。紙粘土、メッシュ、ハニカム紙、割りばしなどを使用し、児童の自由な発想が感じ取れる作品となっている。



図⑤

図⑤はワイヤーと枝を用いて高さを出している。意図的に液体ねん土をかけつけてさびしい様子を表現しており、不織布に小さく切ったワイヤーを振り掛けたり、小さなピースを細かく配置しているのも面白い。

2.1.6 考察

実践では、昨年度の取り組みをもとに「白の世界」について、「動物たちの命輝く白の世界」、「自然がつくる神秘的な白の世界」など白の美しさについて心に響く言葉を添えた資料や不織布やひもを液体ねん土で固めた実物などを準備した。また、指導においては、学習活動の中で言語活動を活発にする手立てとして、カード(短冊)に全員が自分の考えを書き発表する場面や学習過程ごとに気づきや感動を文にまとめることができる学習プリントを準備した。

表現活動において液体ねん土は新鮮な感動であり、子どもたちは声を上げてねん土の感触を味わいながら取り組むことができた。また、秋から冬にかけて学習を設

定したこともあり、白のイメージが雪の世界やクリスマスに重なり子どもらしい発想として表れた。しかし、白＝雪＝綿といった安易な発想が多くなったり、技術的な経験不足や仕上がりを気にしたりする気持ちから、自分の思うような形にできない児童や、つくりなれていない白だけの表現やべとべとの感触に戸惑い、ダイナミックで思い切った表現力がかかる作品もあり、白い世界のイメージ化には個に応じた支援の工夫の必要性を感じた。

作品鑑賞では、出来上がった作品に自分のイメージにあった題名をつけたり、教室に展示したり、暗室でLEDライトの光を当て鑑賞会を行うことで、より豊かに作品を味わうことができた。児童の感想からは白の世界について、白は静かな感じ、白の世界は“無”という感じで美しさが沢山秘められている、など学習前と学習後での自分の思いの違いや新しい発見が多く見られ、白の世界の美しさを感じ取っている様子があり、感性の育ちを感じた。また、学習中の言語活動に関しては、制作意欲を高め、発想を広げるための効果的な活動として今後も必要性を感じた。課題として、題材によって取り入れるべき・場面・内容・方法などの検討が考えられた。

実践をふり返る中で、今回の学習は手を汚し、試行錯誤しながら考え活動することで、子どもたちの材料体験を深め、五感をはたらかせながら取り組むことができた。また、液体ねん土と素材の組み合わせの工夫や、白の世界についてのイメージを言語活動からより広く探る試みをする子どもも出てきた。しかし、今日の子どもの造形活動は現代の日本社会のモノづくりにおいての危機感に同じく子ども達の周りからもその時間・仲間・広場が変化し、減少しているのではないだろうか。今後も図工科では子どもたちの体験や感動を大切に、教師も子どもも心はずませながら学習に取り組みたいと考える。

3. まとめ

この度は授業過程において、白の世界といった意識的な学習を重ねた結果、液体ねん土の感触や造形力といった部分よりも様々な素材が白いものでおわれていくという情景的な部分が児童の創造的な気持ちを揺さぶったといえるであろう。その意味では目標Ⅱ・Ⅳについてはある程度達成できたと考えてよいだろう。

しかしながらⅠ・Ⅲの液体ねん土に関心を持ち材料の特性に気づき、試しながら工夫してつくるといった部分においては、児童の感想例をみてもその部分についての言及も少なく、作品においても個性的な表現ではあるが、液体ねん土そのものの素材の面白さを表現している作品

は少なかつたように感じた。これは第6学年という材料や用具の扱い方も巧みになり、表し方にこだわってかいたりつくったりし、自分の表したい主題が明確になる年代であるのも一つの要因かもしれない。今後の目標として、液体ねん土の素材の面白さをいかした造形遊び的な要素も踏まえた学習も行っていきたい。

ただ、この液体ねん土については、幼児教育の場面では、まだまだ使用されていない傾向がある。乳幼児には扱いが難しい部分もあるが、液体ねん土の質感の部分に着目すれば5歳児でも非常に面白い活動ができるであろう。小学校の粘土造形を念頭におく年長児の粘土遊びとしての造形教材となりえるであろう。

造形活動は美しいものや、ものづくりの楽しさにふれる中で、子ども達が夢中になり、心を開き、創意工夫し、達成感を得、その中で人間らしい豊かな心と感性を養う大切な活動である。同時に皆と共に活動することで、友達の多様な思いや答えを知り、その違いや良さを

共感的に受け止めながら交流し合い、他との違いを認められる力や、作品を通したコミュニケーション力を育む大切な時間でもある。子ども達を取り巻く今日の様々な状況を考える時、社会の中で受身になる事が多い現代の子ども達にとって、本物の体験をし、自らが作り手＝主体となる造形活動は、まさに「生きる力」を培う場であると考えられる。

引用文献・参考資料

- 1) 文部科学省 2017 小学校学習指導要領解説図画工作編
- 2) 井上周一郎・草野汐理 2017 小学校の粘土造形を念頭におく年長児の土粘土による粘土遊び「九州地域科学研究所所報」
- 3) 尾前智子 今こそ図工！私の思いが未来を創る「鹿児島県総合教育センター」

